結果構文と同族目的語の異同と
二次述語との統語的相関性

三輪　健太

１．はじめに

先行研究では､結果構文と同族目的語構文は共に結果の意味を表すものとされてきたが、両構文が持つ結果の意味とは同一のものと言えるだろうか。もし異なるとするならば、どのような点において異なるのだろうか。本稿はこの両構文の結果の意味をそれぞれ明らかにした上で、それらの共通点、相違点を明らかにすることを目的とする。以下ではまず、これまでの二次述語の統語構造に関する先行研究を概観する（第２節）。次に結果構文、及び同族目的語構文の特性を記述し、両構文の比較対象を行う（第３・４節）。最後に二次述語と同族目的語構文との間に統語上の相関関係があることを示す（第５節）。

２．二次述語の統語構造

形容詞を用いた二次述語（Secondary Predicate）は以下のタイプが提案されてきた。

(1) a. John left the room **happy**. （主語志向の二次述語）
b. John drank the beer **flat**. （目的語志向の二次述語）
c. John hammered the metal **flat**. （結果述語）

(1a)の二次述語 happy は主語の John を、また(1b)の二次述語 flat は目的語の the beer を叙述しており、前者を主語志向の二次述語、後者を目的語志向の二次述語と呼ぶ。一方、(1c)の例は結果構文（Resultative Construction）と呼ばれ、二次述語の flat が金属を叩いた結果を描写する働きをしている。この場合、結果の二次述語は結果述語（Resultative Predicate）と呼ばれる。これらの二次述語が現れる位置は統語的に異なるとされてきた。これまでの二次述語に関する研究には、大別すると、目的語と二次述語の関係を小節（small clause）として扱う分析（Hoekstra 1988, Carrier and Randall 1992 , Stowell 1995）と、述語理論（the theory of predication）に基づき主語と述語として扱う分析（Williams 1980, Roberts 1988, Nakajima 1990, Winkler 1997）がある。

Williams（1980)は、主語とは同一の最大投射範疇内にある述語を c 統御（c-command）する NP であるとし、[1, 2] これらの主語と述語の叙述関係を同一指標を用いて表している。Williams は叙述関係に成り立つ規則を(2)と規定し、その規則が働く場合に述語に課せられる条件として(3)を提案している。

(2) Coindex NP and X. (Williams 1980: 206)

(3) The C-Command Condition on Predication
If NP and X are coindexed, NP must c-command X or a variable bound to X.

(2)は、主語である NP と述語である X は同一指標が付与されていることを要求し、(3)は、その場合に NP が述語 X を c 統御していなければならないということを条件づけている。この条件に加え、Williams は、述語が主語である NP との相互 c 統御（mutual c-command）を要求することを提案している。[3] Williams の主張に基づいて主語志向の二次述語と目的語志向の二次述語の統語的差異を示すと (4)のようになる。

(4) a. $[_{s}$ NP_1 $[_{VP}$ V $NP_2]$ AP]（主語志向の二次述語）
b. $[_{s}$ NP_1 $[_{VP}$ V NP_2 AP]]（目的語志向の二次述語）

(4a)では、主語 NP と二次述語が VP 外部に起こり、相互 c 統御関係にある。一方、(4b)では目的語 NP と二次述語が VP 内部にて相互 c 統御している。Williams の分析に基づいて(1)の例を記述すると(5)のようになる。

(5) a. $[_{s}$ John$_i$ $[_{VP}$ left the room] happy$_i$].
b. $[_{s}$ John $[_{VP}$ drank the beer$_i$ flat$_i$]].
c. $[_{s}$ John $[_{VP}$ hammered the metal$_i$ flat$_i$]]. (Roberts 1988: 704)

主語志向の二次述語の例である(5a)では、主語 John が述語である happy を相互 c 統御しており、John は VP の外部に生起している。一方、目的語志向の二次述語である(5b, c)では、述語と同一指標を持つ NP は VP 内部に生起することで、相互 c 統御することがわかる。これにより、主語志向の二次述語は、主文主語と相互 c 統御する形で VP の外部に生起し、一方、目的語志向の二次述語は、VP 内部に起こることで目的語と相互 c 統御しているといえる。

Roberts (1988)は、相互 c 統御による分析を受け継ぎ、主語志向の二次述語が VP 外部ではなく VP 内部に生起することを、実証的事実に基づき論じている。[4] Roberts は、主語志向の二次述語と目的語志向の二次述語の統語的差異を(6)のように示している。

(6) a. $[_{VP}$ $NP_1[_{V'}$ V $NP_2]$ AP]（主語志向の二次述語）
b. $[_{VP}$ $NP_1[_{V'}$ V NP_2 AP]]（目的語志向の二次述語） (ibid.: 708)

二次述語が VP 内部に生起するとするならば、主語 NP と相互 c 統御するためには、主語 NP も同様に VP 内部に起こる必要がある。ここで Roberts は、動詞句内主語仮説（VP Internal Subject Hypothesis）を採用しており、[5] 主語 NP が VP 内部に生起し、二次述語との相互 c 統御が可能な構造を提案している。(1)の例を(7)のように示すことができる。

(7) a. [$_{VP}$ John$_i$ [$_{V'}$ left the room] happy$_i$]

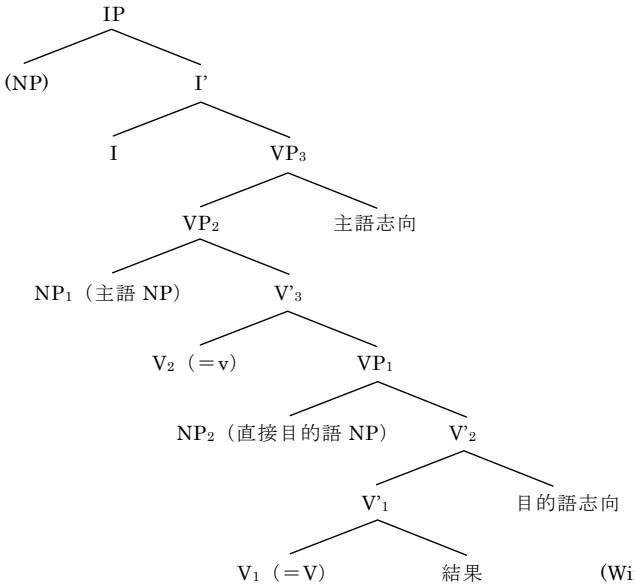
b. [$_{VP}$ John [$_{V'}$ drank the beer$_i$ flat$_i$]]

c. [$_{VP}$ John [$_{V'}$ hammered the metal$_i$ flat$_i$]]

(7)ではすべての主語 John が VP 内部に起こっており、これにより(7a)では、主語志向の二次述語 happy との相互 c 統御が可能となっている。また、(7b)では目的語志向の二次述語 flat と、そして(7c)では結果述語 flat と主語 John が相互 c 統御しており、これによりすべてのタイプの二次述語が同一指標を持つ NP と相互 c 統御することになる。

Roberts の分析では、目的語志向の二次述語と結果の二次述語は統語的に同様の位置に起こるものと想定されていたが、Winkler (1997)では、両者の二次述語が異なる位置に生起するとして(8)の構造が提案されている。[6]

(8)



(Winkler 1997: 81)

(8)に示されるとおり、すべての二次述語は VP 内部に生起しており、主語志向の二次述語は NP_1、つまり主語 NP と相互 c 統御をしている。また目的語志向の二次述語と結果述語は共に直接目的語である NP_2 と相互 c 統御している。

ここで、述語理論に基づいて主語と述語の関係をまとめておく。NP と述語の間に叙述関係が成り立つ場合、両者は同一指標によって表示され、それらの統語的関係は相互 c 統御する関係となる。この関係は二次述語においても同様であり、二次述語とその同一指標を持つ NP とは相互 c 統御する関係になる。このとき、二次述語は主語志向、目的語志向、結果のタイプの内、どのタイプであっても VP 内部に生起し、たとえ主語志向の二次述語であっても、動詞句内主語仮説を採用することにより、VP 内部に生起すると結論づけられる。

３．結果構文

本節は３つのタイプの二次述語の中の結果構文に焦点を絞り、この構文のアスペクトに関して議論を進めていくことにする。結果構文は、(9a)のような形容詞を結果述語にとるタイプの他に、(9b)に見るような PP を結果述語にとるタイプの結果構文も存在する。

(9) a. He hammered the metal flat.
b. He drank himself into the grave.

(9a)の結果述語である flat は、ある行為によって目的語である the metal がいたる結果状態であるといえる。これは(9b)のような前置詞句で表される結果述語でも同様であり、drink し続けた結果、至った状態を PP が表している。結果状態を表すのに into という前置詞が用いられていることからもわかるとおり、結果述語が担う意味役割は Goal である。結果構文が Goal の意味役割を担うということは、この構文が終結点を持った事象を表すことを示しており、Levin and Rappaport Hovav (1995)はこの構文が有界的事態を表わすことを指摘している。また、Wyngaerd (2001)は(10)の例を挙げ、結果構文のアスペクトにかかる制約を(11)のようにまとめている。

(10) a. Tim danced himself {completely/almost/half/*very} tired.
b. Max shouted himself {completely/almost/half/*very} hoarse.
c. The joggers ran the pavement {completely/almost/half/*very} thin.
d. Charley laughed himself {completely/almost/half/*very} silly.

(Wyngaerd 2001: 64)

(11) RESTRICTION ON RESULTATIVES: Resultative predicates denote a bound scale.

(11)の制約は、結果述語で表現される事象が段階性を持ち、終結点を持っていることを示している。(10)に見られる結果述語を修飾する副詞の内、complete/almost/half に関して

は、ある事象がどの段階にあるかを示す働きを持つ。一方、三原 (2009)によると、very は文脈上想定し得る標準値を要求するために、相対形容詞(relative adjectives)のみを修飾し、他のものとの比較を要しない絶対形容詞(absolute adjectives)を修飾することはできないという。

Wechsler (2005)は、Hay, Kennedy and Levin (1999), Kennedy and McNally (1999)で提案された形容詞のスケール構造という概念を用いて、結果構文が示す有界的段階性を説明している。スケール構造とは形容詞が表す段階性のことであり、Wechsler は形容詞を段階的/非段階的、スケール構造が開いているか閉じているか、そして極点が最大か最小かという 3 つの基準に基づいて細分化している。[7]

(12)

非段階的形容詞(non-gradable adjectives)	dead / triangular / invited / sold
開いたスケールの形容詞(open scale adjectives)	long / wide / short / cool
最小極点を有する閉じたスケールの形容詞(minimal end-point closed scale adjectives)	wet / dirty
最大極点を有する閉じたスケールの形容詞(maximal end-point closed scale adjectives)	full / empty / straight / dry

(Wechsler 2005: 262-263)

Boas (2000, 2003)はコーパスからのデータを基に、結果述語には(18)の中の非段階的形容詞と最大極点を有する閉じたスケールの形容詞が圧倒的に多いこと、そして動詞が極点を示さない非限界動詞には、必ず閉じたスケールの結果述語が選ばれなければならないという制約があることを指摘している。[8] これは動作の結果を表す結果構文において、非限界動詞ではその有界性を示すことができないために、閉じたスケールの結果述語によって動作の終了を示す必要があるためである。つまり、結果構文においては動詞か形容詞のどちらかによって行為の終結点が示されなければならないことになる。換言すると、結果述語は構文の telicity を atelic から telic へと変える働きをしているといえる。telicity とはある事象の終結点の有無に関する概念であり、ある事象の telicity が telic であるならば、その事象は終結点が示されていることになる。一方、atelic とはそのような終結点を持たない事象を指す。結果述語の telicity への関与は、次のテストを用いて確認できる。

(13) a. John hammered the metal (for an hour / *in an hour).
b. John hammered the metal flat (*for an hour / in an hour).
c. John drank (for an hour / *in an hour).
d. John drank himself to death (*for an hour / in an hour). (ibid.: 259)

for 句は atelic の事象と、また in 句は telic の事象と共起する。(13a, c)はともに結果述語をとっておらず、双方とも atelic の動詞を主文述語にとっているため、in 句との共起ができない。これに対し(13b, d)では結果述語をとっており、これにより in 句との共起が可能になっている。Wechsler によると、これは結果述語をとることにより、事象の telicity が atelic から telic へと変化したためだとされている。このように結果述語は構文のアスペクトを変化させるという働きをしており、そのため結果構文が表す事象の telicity は必ず telic となる。

４．同族目的語

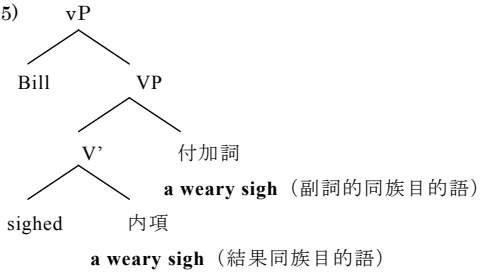
同族目的語構文は、結果構文と同様に結果の意味を表すとされている。本節では同族目的語構文の特性を考察し、結果構文との比較を試みる。

同族目的語構文とは、(14)の例文に見られるように、動詞と同族の NP を目的語にとる構文を指す。(14a)の a gruesome death のように、動詞と同一語源を持つ NP や、(14c)の a weary sigh のように、動詞と同形の NP による目的語を同族目的語と呼ぶ。

(14) a. John died a gruesome death.
b. Harry lived an uneventful life.
c. Bill sighed a weary sigh.

これまでの研究で、同族目的語には２つの用法があることが指摘されてきた。[9] 先行研究においては、(14c)の例文は２通りの解釈を持つとされ、一つは、「Bill はうんざりさせるため息をついた」という結果の読みと、もう一方は、「Bill はうんざりしてため息をついた」という副詞的読みが挙げられる。これについて Nakajima (2006)は、両者の解釈の違いはその統語構造を反映しており、同族目的語の a weary sigh が統語上のどの位置に現れるかによって解釈が異なることを指摘している。

(15)



(15)では、内項と付加詞の位置にそれぞれ a weary sigh が現れている。Nakajima は、内項に同族目的語が現れると結果の読みとなり、付加詞に現れると副詞的読みになるとしている。本稿では前者を結果同族目的語、後者を副詞的同族目的語と呼ぶことにする。

ここで、結果同族目的語の結果の意味に焦点を当てることにする。結果構文と結果同族目的語の結果の意味はどのような点で異なり、またどのような共通性が見られるだろうか。

(16) Dorothea smiled a wicked smile. (Massam 1990: 161)

(16)の同族目的語構文の結果の読みでは、Dorothea が笑みを浮かべ、その笑みが邪悪であったことを表している。これは Dorothea が笑うという行為をし、その結果として生み出されたものが邪悪な笑みであったということに他ならない。このように、結果同族目的語は動詞が表す行為の産出物として捉えることができる。

このような行為の産出物として現れる目的語は、結果同族目的語に限られない。

(17) a. Kay poked the screen.
b. Kay poked a hole in the screen. (ibid.: 170)

(17a)の目的語 the screen はつつくという動作の対象、つまり被影響目的語（affected object）として捉えられるのに対し、(17b)の a hole はつつくという動作により生じた行為による産出物、つまり結果目的語（effective object）として認識される（Quirk et al. 1985: 750 を参照）。このように目的語は動作の対象としての被影響目的語と、行為の産出物としての結果目的語とに分けることができ、結果同族目的語は後者と同様の機能を持つということができる（高見・久野 2002: 133-177 を参照）。このことから、結果同族目的語が担う意味役割は、他の目的語と同じく Theme であることがわかる。

続いて、結果同族目的語のアスペクトに関する問題を見ていくことにする。Macfarland (1995)は、結果同族目的語が事象の telicity を atelic から telic へと変える働きを持つとし

ている。終結点を持たない atelic の動詞の直接目的語として結果同族目的語が現れることでその行為の終結点が示され、それによって結果の読みが生じるのだという。この終結点の有無を結果構文でも用いたテストを用いて確認する。

(18) a. Martha sang (for an hour / *in an hour).
b. Mary laughed (for an hour / *in an hour).
c. Josie danced (for an hour / *in an hour).
d. John sneezed (for a minute / *in a minute). (Tenny 1994: 39)

(19) a. Martha sang a joyful song (for five minutes / in five minutes).
b. Mary laughed a mirthless laugh (for one minute / in one minute).
c. Josie danced a silly dance (for five minutes / in five minutes).
d. John sneezed a horrific sneeze (for one minute / in one minute).
(ibid.)

(18a)、(19a)で用いられている sing は、本来 atelic の動詞であるため、(18a)では「Martha は 1 時間歌った」のように、for 句との共起は可能であっても、「1 時間で歌った」のように in 句との共起はできない。しかし、(19a)のように結果同族目的語を伴った場合では、in 句との共起が可能である。これは(18a)の事象の telicity が atelic から telic へと変化し、「5 分間で楽しい歌を歌った」というように、歌うという行為に終結点が示されたことを示している。このことから、結果同族目的語が動詞の telicity を atelic から telic へと変化させていることがわかる。また(19a)では in 句だけでなく、for 句との共起も可能となっているが、これは副詞的同族目的語の用法であり、「5 分間楽しげに歌った」という意味である。このように副詞的同族目的語には、事象の telicity への関与は見られない。

次に、結果同族目的語と共起している形容詞の働きについて考察する。結果述語の直接目的語を叙述する働きとは異なり、(19)で用いられている形容詞は目的語を修飾している。また、(19)には silly や horrific のような開いたスケールの形容詞も現れており、結果述語のスケール構造に課せられるような制約は見られない。このことから、結果同族目的語のスケール構造は上述のアスペクト上の変化には関与していないと考えられる。

上記のアスペクト上の変化を可能にする原理に関して、Macfarland は結果同族目的語による telicity の変化は、直接目的語が事象を計測（measure out）することによって可能になるとしている。これは Tenny (1994)による直接内項計測制約に依拠している。[10] 計測とは直接内項がある事象の終結点までの時間幅を段階的に測り取ることを指す。

(20) a. climb the ladder in an hour.
b. climb the ladder for an hour.

(20)で用いられている climb は、本来は終結点を持たない atelic の動詞であるが、(20a)は in 句を伴っていることから telic となっていることがわかる。一方、(20b)は for 句と共起しており、依然として atelic のままである。これは「はしご」という物理的な長さを持つ NP が、climb という atelic の行為を計測する働きをし、時間幅を持ち終結点が示された行為へと捉え直されたことを表している。つまり、事象を計測する能力を持つ NP が直接内項に現れることによって、telicity に変化が起こり、終結点を持った事象と解釈されるようになる。これと同様の原理が結果同族目的語にも働く。(19a)の例で言うならば、sing という atelic の動詞が a joyful song という段階的な時間枠を持った NP によって計測されることによって、行為の終結点が明示されるようになるのである。

ここで結果構文と結果同族目的語の特性を比較し、両構文間の相違点と共通点を確認する。以下に結果述語と結果同族目的語の相違点と共通点をまとめておく。

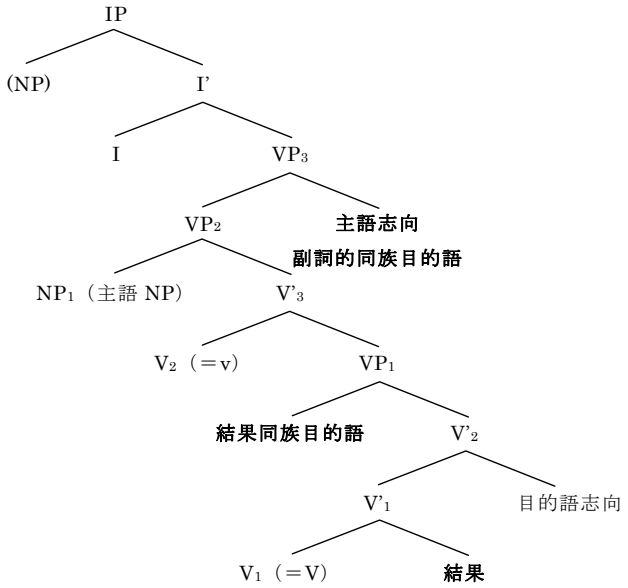
(21)

	結果述語	**結果同族目的語**
意味役割	Goal	Theme
結果の種類	結果状態	結果目的語
telicity	atelic から telic へ変化	atelic から telic へ変化
アスペクト変化の要因	形容詞のスケール構造	直接内項による行為の計測
形容詞の働き	直接目的語を叙述	同族目的語を修飾
形容詞のスケール構造の制約	非段階的形容詞 最大極点を持つ形容詞	制約なし

(21)に示したとおり、結果述語と結果同族目的語の間には、いくつかの点において異なる性質が確認される。まず、結果述語が Goal の意味役割を担い、事象の結果状態を表すのに対し、結果同族目的語は Theme の意味役割を持つ結果目的語として機能している。両構文ともアスペクトの変化に作用するという点では共通するが、その原理は異なっており、前者は形容詞のスケール構造により、後者は直接内項が行為を計測することによって事象の telicity を atelic から telic へと変化させている。また両構文における形容詞の働きは、前者の構文では同一指標を持つ NP を叙述するのに対し、後者の構文では動詞と同族の目的語を修飾している。結果述語における形容詞のスケール構造は、事象の終結点を示すという働きを持つために、非段階的形容詞と最大極点を持つ形容詞の 2 つに限定される。一方、結果同族目的語では形容詞は事象のアスペクトに関与してはおらず、同族目的語を修飾するに留まるので、スケール構造の種類は結果述語のような制限は受けない。

ここで、二次述語と同族目的語構文の統語構造の間に並行性が見られる点に注意されたい。二次述語の場合では、AP が動詞の補部に生じると、目的語志向の二次述語、もしくは結果述語となり、付加詞位置に起こると主語志向の二次述語となる。他方、同族目的語構文では、動詞の補部に結果同族目的語が生じ、付加詞位置には副詞的同族目的語が生起する。

(22)



((8) 再掲)

(22)の図を見てもわかるとおり、主語志向の二次述語と副詞的同族目的語は、共に付加詞位置に生じているのに対し、結果述語と結果同族目的語は、同一の VP 内部に生起している。このことから、結果構文、及び同族目的語構文の統語構造は、二次述語の統語構造と相関関係を持っていることがわかる。

５．まとめ

本稿では、結果構文と同族目的語の特性を比較対照し、さらに両構文の統語構造と二次述語の統語構造に相関関係が見られることを確認した。第２節では、二次述語の統語構造に関する先行研究を概観し、３つのタイプの二次述語が、それぞれ VP 内部の異なる位置

に生起することを見た。続いて第３・４節では、結果構文と同族目的語構文の比較対象を行い、両者が異なる特性を持ちながらも、事象の telicity を atelic から telic へと変化させるという共通する特性を持つことを確認した。また、両構文の統語構造の間に相関関係があることを指摘した。

注

＊本稿は、平成 23 年度学習院大学英文学会（平成 23 年 10 月 15 日）における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。発表や本稿執筆に際し、中島平三先生、高見健一先生をはじめ、多くの方々から貴重な指摘や助言を頂いた。また、本稿の査読者からも多くの有益なご指摘を頂いた。ここに記して感謝したい。

1) Williams (1980)は c 統御の定義を以下のように示している。
   (ｉ) A c-commands B iff every branching node which dominates A dominates B.
   (Williams 1980: 204 fn.1)
2) Williams は、述語は主語、または先行詞に c-下接（c-subjacent）しなければならないとしている。C-下接の定義は以下のとおりである。
   (ｉ) B is c-subjacent to A iff A is dominated by at most one branching node which does not dominate B. (ibid.)
3) 主語と述語の統語関係は、研究者によって異なる。Nakajima (1990)は、主語と二次述語の間には相互 m 統御（mutual m-command）が条件づけられるとしている。
   (ｉ) A secondary predicate must be mutually m-commanded by a primary predicate or its head.
   (Nakajima 1990: 284)
4) ここで Roberts (1988)は、VP 前置（VP Fronting）、Though 移動（*Though* Movement）、疑似分裂文（Pseudoclefts）によるテストを用いて、二次述語が VP 内部に生起することを示している。
5) 動詞句内主語仮説の定義は、中島・池内（2005: 36)を参照。
6) Nakajima (1990), Winkler (1997)は、ある要素が主語志向の二次述語を越えて目的語から外置することができないことを指摘し、このことから目的語志向の二次述語と結果述語の統語上の位置が異なることを指摘している。
7) Hay, Kennedy and Levin (1999), Kennedy and McNally (1999)が提案するスケール構造と Wechsler (2005)が提案するスケール構造とでは、多少定義が異なる点がある。ここでは Wechsler によるスケール構造を参考にする。
8) 三原（2009)を参照。
9) 同族目的語の解釈を副詞的とする立場に Jones (1988)が、結果の解釈をする立場に Massam (1990), Levin and Rappaport Hovav (1995), Macfarland (1995)がある。

10) 直接内項計測制約 (Measuring-Out Constraint on Direct Internal Arguments)

(i) The direct internal argument of a simple verb is constrained so that it undergoes no necessary internal motion or change, unless it is motion or change which 'measures out the event' over time
(where 'measuring out' entails that the direct argument plays a particular role in delimiting the event). (Tenny 1994: 11)

引用文献

Boas, Hans C. (2000) *Resultative Constructions in English and German*. Doctoral dissertation, University of North Carolina.

Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford: CSLI Publications.

Carrier, Jill and Janet Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives." *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.

Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin (1999) "Scalar Structure Underlies Telicity in 'Degree Achievement'." *Semantics and Linguistic Theory* 9, 127-144.

Hoekstra, Teun (1988) "Small Clausal Results." *Lingua* 74, 101-139.

Jones, Michael A. (1988) "Cognate Objects and the Case Filter." *Journal of Linguistics* 24, 89-110.

Kennedy, Christopher and Louise MacNally (1999) "From Event Structure to Scale Structure: Degree Modification in Deverbal Adjectives." *The Proceedings of SALT* 9, 163-180.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Macfarland, Talke (1995) *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*. Doctoral dissertation, Northwestern University.

Massam, Dianne (1990) "Cognate Objects as Thematic Objects." *Canadian Journal of Linguistics* 35, 161-190.

三原健一 (2009)「スケール構造から見る結果構文」小野尚之(編)『結果構文のタイポロジー』141-170. ひつじ書房.

Nakajima, Heizo (1990) "Secondary Predication." *The Linguistic Review* 7, 275-309.

Nakajima, Heizo (2006) "Adverbial Cognate Objects." *Linguistic Inquiry* 37, 674-684.

中島平三・池内正幸 (2005) 『明日に架ける生成文法』開拓社.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

Roberts, Ian (1988) "Predicative APs." *Linguistic Inquiry* 19, 703-710.

Stowell, Timothy A. (2000) "Remarks on Clause Structure." *Syntax and Semantics* 28: *Small Clauses*,

ed. by Anna Cardinaletti and Maria Teresa Guasti, 271-286, Academic Press, New York.
高見健一・久野暲 (2002)「同族目的語構文と非能格性」『日英語の自動詞構文』133-177. 研究社.
Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer, Dordrecht.
Vanden Wyngagaerd, G. (2001) "Measuring Events." *Language* 77, 61-90.
Wechsler, Stephen (2005) "Resultatives under the 'Event-Argument Homomorphism' Model of Telicity." In Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspects*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.
Williams, Edwin S. (1980) "Predication." *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.
Winkler, Stephen. (1997) *Focus and Secondary Predication*. Mouton de Gruyter, Berlin.